

日本医学検査学会

今 村 文 章*

(社)日本臨床衛生検査技師会(会長 小崎繁昭、会員約 49,000 人)主催による標記学会が、(社)北海道臨床衛生検査技師会の担当で佐藤和昭(札幌医科大学附属病院)を学会長に平成 20 年 5 月 30 日(金)・31 日(土)の両日、札幌市のコンベンションセンター、アクセスサッポロ、札幌市産業振興センターを会場に開催された。

メインテーマは「道」、サブテーマは「Frontier-Spirit をふたたび」、そして特別企画として招待講演「旭山動物園の活性化」(小菅正夫:旭川市旭山動物園園長)をはじめ、特別講演 3 題、教育講演 5 題、シンポジウム 5 題、パネルディスカッション 3 題、教育カンファレンス 4 題、パネル展示(骨髄像) 1 題、海外演題 1 題、アフタヌーンセミナー 1 題、ランチョンセミナー 25 題、一般演題については 740 題(口演 519 題, ポスター 221 題)を数えたが、発表形式について以下に演題数(口演発表数/ポスター発表数)として示す。微生物(40/19)、免疫血清(78/19)、血液(28/39)、臨床化学(90/33)、病理(19/16)、細胞(0/20)、生理(115/20)、一般(27/18)、公衆衛生(3/0)、輸血(24/26)、情報システム(8/4)、遺伝子・染色体(6/0)、管理運営(28/8)、教育(11/0)、チーム医療(23/0)、基礎研究・その他(18/0)である。同時にアクセスサッポロで開催された機器展示には 89 社(847 小間)の出展があった。

学会に先立ち日韓代表者会議、日韓交流功労者会会議、日韓協定締結 30 周年記念式典など日韓交流一連の行事や、日本臨床検査技師会平成 20

年度第 1 回定期総会などが併せ開催された。

札幌についてはあらためて紹介することもないが、開催期間中はライラックの季節でありながら地元では「リラ冷え」と言われているそうで、やや肌寒い日であった。また二つの会場がやや離れておりシャトルバスでの移動が必須であった。

一般演題の数から見てもさすがに人気の高い札幌開催で、何処の会場も盛況であった。ちなみに学会入場者数は 200 名余の学生を含め 3,330 名(含非会員 955 名)、また展示会場には延べ 17,000 名を超える入場者を数えた。

懇親会に至っては、有名なサッポロビール園での開催ということで韓国、中国、台湾など外国からの参加も含め 800 名を超える参加者で、ジンギスカン料理と生ビール、また福引き抽選なども行われ盛り上がった。

さて、学会の内容について少し紹介しておくが、招待講演では「旭山動物園の活性化」と題し、小菅園長が閉園の危機から全国有数の人気動物園へと転換したプロセスを動物の可愛さや面白さを交えながら話されたが、医療界も苦しい大変な時期を迎えている我々にも新しい発想、着眼点など参考になる講演であった。

我々、技師養成の立場にあるものにとって最も興味深かったのは、一般演題に教育や基礎研究が独立したジャンルとして設けてあったことである。今後、学内での研究の成果の発表や教育の問題など議論する機会が設けられたことは検査、引いては医療の進歩に欠かせない基礎研究者や教育者に

*学校法人 吉田学園 九州医学技術専門学校 imamura@kyuigi.ac.jp

は大変有意義であった。

渡辺直樹教授(札幌医科大学臨床検査医学講座)が「検査運営とその戦略」について特別講演をされたが、技師のあり方に求められるものが施設により大きく異なることを感じた。さらに、スキルは勿論、高い見識の持てる技師を育成しなければならないことを痛感させられた。

内容が多く、全てを聴講したわけではないが、

教育者あるいは教育施設に関係することを記憶の中から紹介させて頂いた。本学会は臨床検査の専門学会としては内容、規模ともに世界最大で、最も充実していると言っても過言ではない。

横浜で開催される次年度の本学会には会員技師のみではなく、技師の育成、教育に携わっておられる多くの先生や学生の方々の参加を期待している。